

■ ■ ■ 基調報告 ■ ■ ■

力合わせることで身につく

幼稚園は、19世紀にドイツのフレーベルがつくった。フレーベルは森林の技師で、測量などをしており、仕事に枝や木の皮を剥ぎ、積み木を考案した。森と幼児教育の結びつきは、昔から深い。

森の幼稚園の先進地であるデンマークやドイツでは、森の入り口で親が子どもを園側に預ける。職員に見守られながら、自由に森を移動し、道草も自由。本の朗読や昼食も森の中。フィールドには、私有林も使わせてもらっている。

自然はいいことばかりではない。雨や雪の日もあり、ヘビなどもいて、怖い目にもあふ。森林や自然には、子ども同士で力を合わせないと立ち向かえない。自分や仲間を守るため、コミュニケーションを自然にとる。冒険の発達が通常の園児より早く、情緒面でも安定した子どもが育まれる。



東京農大准教授 うえはら 直宏 さん

NPO法人日本森林療法協会理事長。高校教諭や障害者施設職員、カウンセラーなどを経験し、森林療法を実践・研究。農学博士。近著に「森林療法の手びき」。64年生まれ。

一人一人違う、が出发点

未就学の子どもは、この世に生まれてまだ数年しかたっていない。急いで、知識を詰め込む必要はない。笑ったり泣いたり、怒ったりすねたり、何かにじっと集中したり……。幼児と日々森で遊んでいると、無限の可能性を感じる。自然のリズムに合わせて、ゆっくりと育つことのできる場がぜひ必要だ。

森と子どもには、個性が豊かという大きな共通点がある。葉っぱ一枚一枚が違うように、子どもも一人ひとり違う。それが一番自然だということだが、「森のようちえん」の保育の出发点だ。

親が森で過ごすことも大切にしている。「親」という役割を一度離れ、「私」に戻って森で過ごす。子どもが育つ森で、親もまた十分に成長できる可能性がある。子育ては、「親育て」につながっていると実感している。



キーブ森のようちえん 事務局長 小西 賢士 さん

財団法人キーブ協会職員。自然案内人。02年度に「森のようちえんプロジェクト」を立ち上げ、年間120日以上を幼児と共に森で過ごす。74年生まれ。

林業にも活気 戻るはず

高校生の自然体験学習で、小豆がサヤの中にできることを、引率の教諭までが知らなかった。柿を丸かじりできない。林業地の子どものすら、森で遊ばなくなった。

林業従事者が少なく、危機感がある。次代を担う子どもたちに、どうやって森や林業を理解させていくかが問われている。

森を身体で感じ、身についた知識にする工夫が必要だ。隠微な林業用語は距離を生む。木の形や色、においや手触りを確かめると、子どもの笑顔が広がる。それで木のよさを知ってもらえる。

子どもと森が出会うことで、不登校といわれる林業にもやがて活気が戻ってくるはずだ。

私たちは、自然に生かされていることに、疎かになってしまった。森を経験することで、自然への畏敬(いけい)の気持ちもぜひ持ってほしい。



林業家 しのうえ 信一 さん

愛媛県の久万地方で伐採・造園などの林業従事者。林業に携わりながら、森を子どもたちの体験学習の場としても提供している。05年度の「森の手・名人」。45年生まれ。

幼児を森で過ごさせ、自然の姿に接する「森の幼稚園」活動が、自然を子どもたちに返すために、大人のすべきことは、10月用かれる。27日、松山市の愛媛県武道館で開かれた「国民参加の森林づくり」シンポジウムで話し合った。

子どもと森 つなごう

「国民参加の森林づくり」シンポジウム

「森の幼稚園」活動が、自然を子どもたちに返すために、大人のすべきことは、10月用かれる。27日、松山市の愛媛県武道館で開かれた「国民参加の森林づくり」シンポジウムで話し合った。



特定の園舎も開く。森も持つ。森を保育の場として生かしている幼稚園とデンマークで始まり、待たされた。今では400カ所以上ある。一緒に活動する。

幼児を森で過ごすことで、自然の姿に接する「森の幼稚園」活動が、自然を子どもたちに返すために、大人のすべきことは、10月用かれる。27日、松山市の愛媛県武道館で開かれた「国民参加の森林づくり」シンポジウムで話し合った。

「森の幼老園」はいいか

子どもと年寄りには相性がいいんだよ。幼い子と老人がともに育つ「幼老園」をつくれませんか。司会をしながら、教育にかかわる市民運動に力を注いだ教育者、道山啓さんの言葉を思い出した。会場で印象深かったのは、森と子どもをつなぐ活動への関心、意欲の高さだ。

か。自然を子どもたちに返すために、大人のすべきことは、10月用かれる。27日、松山市の愛媛県武道館で開かれた「国民参加の森林づくり」シンポジウムで話し合った。

広がる「森の幼稚園」

小西 情緒発達お母さんも変わる 上原 放置林の整備にも有効

「森の幼稚園」活動が、自然を子どもたちに返すために、大人のすべきことは、10月用かれる。27日、松山市の愛媛県武道館で開かれた「国民参加の森林づくり」シンポジウムで話し合った。



特定の園舎も開く。森も持つ。森を保育の場として生かしている幼稚園とデンマークで始まり、待たされた。今では400カ所以上ある。一緒に活動する。

幼児を森で過ごすことで、自然の姿に接する「森の幼稚園」活動が、自然を子どもたちに返すために、大人のすべきことは、10月用かれる。27日、松山市の愛媛県武道館で開かれた「国民参加の森林づくり」シンポジウムで話し合った。

シンポジウムを終えて 佐田 智子

たい林業関係者、子どもと森に接する保育・教育関係者、林業をどうにか仕組むをどうするか。新シニアの森を託す。森の豊かな成長者、林業を担った人々をつた。新シニアの森を託す。森の豊かな成長者、林業を担った人々をつた。

■ ■ ■ 基調講演 ■ ■ ■

自然にふれ豊かな感性を



ケネディ米大統領の時代、レイチェル・カーソンは「沈黙の春」を書き、化学物質による環境汚染に警鐘を鳴らした。出版直後から反響を呼び、化学企業などから猛烈な批判を浴びたが、カーソンは決してひるまなかった。その信念を支えたのは、幼いときから培われた生命への畏敬の念と、自然の美しさや不思議さに見る感性だった。

カーソンは、米田ペンシルベニア州の自然豊かな町で、森や川や虫や鳥を友だちに遊び回った。すべての生きものは、互いにかかわり合いながら自然界を形づけていることを、カーソンは体験として知っていた。

地球はさまざまな生命の糸で編みあげられ、人間もその綱目のひとつにすぎない。化学物質の攻撃を受け、生命の綱目に穴があくと、その穴は次々に広がっていく。一度失われると、自然も生命も元に戻ることはない。生命はリセットできない。その大切さを伝えるために「沈黙の春」を書き、批判にもひるまなかった。

子どもは自然とふれあい、想像力と創造力を広げる。そのすばらしさをカーソンは「センス・オブ・ワンダー」に記した。知ることは、感じることの半分も重要ではない。豊かな感性の土にまかれた知識の種子は、しっかりと根づき花を開く。

自然を体験する森がなければ、近くの公園や小さな庭でもいい。子どもと定点観察を始めよう。子どもの感性を育てるには、感動を共有してくれる大人の存在が欠かせない。カーソンも共に森を歩いた母親の影響を受けた。

自然破壊は今も続いている。地球の温暖化も止まらない。時計が刻む時間ではなく、自然のリズムに身をまかせてみる。待つことを学び、相手を理解しようという気持ちが育つ。バーチャルではない、本物にふれると、気持ちが楽になる。生命の尊さを身にしみて感じる。森を維持することは、地球を健康な姿に戻し、次の世代に引き継ぐことだ。

自然にふれ豊かな感性を

エッセイスト レイチェル・カーソン 日本協会理事長

かみお けいこ 上原 恵子 さん

東京農大准教授。沈黙の春に衝撃を受け、自然の豊かさを伝えるために「沈黙の春」を書き、批判にもひるまなかった。

主催 国土緑化推進機構・愛媛県・愛媛の森林基金・朝日新聞社・森林文化協会
後援 林野庁・美しい森林づくり全国推進会議
協賛 凸版印刷